

勝島ポンプ所の工事



勝島ポンプ所 があると...



ポンプ所の役割

下水は、地下の下水道管に傾きをつけて自然に処理場へと流れるようになっています。深くなりすぎる場所では、ポンプで地表近くまでくみあげ再び自然に流れるようにしています。また大雨の時は、大量に下水道管に流れ込んだ雨水をすみやかに川や海に放流し、浸水を防いでくれます。



勝島港のイメージ図



東京都下水道局

勝島ポンプ所の役割

浸水被害を解消させます。



目黒川沿岸



よろしく
お願いします。

建設工事中は何かとご迷惑をおかけ致しますが、
皆さまのご理解・ご協力をお願い致します。

川や海・運河の水質浄化を目指します。



勝島運河

勝島ポンプ所建設工事

浸水対策の推進

都市化の進展により雨水流出量が増大し（流出係数が50%から80%に）、下水道が整備された地域においても浸水被害が発生しています。

東京都では、都民生活と高度な都市機能を浸水被害から守るため、3年に1回程度とされる1時間あたり50mmの降雨に対応できるよう、下水道管やポンプ所の整備を進めています。

合流式下水道の改善

区部面積の約85%の地域では、汚水と雨水を同一の管渠に収容して排除する合流式下水道を採用しています。この方式は、雨水排除の効果をより早く発揮する利点がある一方で、ある一定以上の雨が降ると、雨で希釈された下水やゴミなどの一部が雨水吐きやポンプ所から直接、河川や海などに流出する欠点があります。

東京都では、こうした公共用水域の水質を守るため、なるべく多くの下水を処理場へ送水する施設（ポンプ所など）や、ゴミなどが流れ出ない施設を整備する合流式下水道の改善事業を推進しています。

勝島ポンプ所の新設

勝島ポンプ所は、近年の都市化の著しい進展により汚水及び雨水の流出量が増大している既設般洲ポンプ所及び浜川ポンプ所流域の処理能力の増強と閉鎖性水域である勝島運河の水質改善のため建設するものです。

- 事業主体 東京都下水道局
- 施工者 雨水ポンプ棟：前田・東鉄JV
汚水ポンプ棟：東洋・富士工JV
- 発注者 日本下水道事業団



勝島ポンプ所 完成予想図

- 事業主体 東京都下水道局
- 発注者 日本下水道事業団
- 施工者 雨水ポンプ棟
前田・東鉄JV
汚水ポンプ棟
東洋・富士工JV

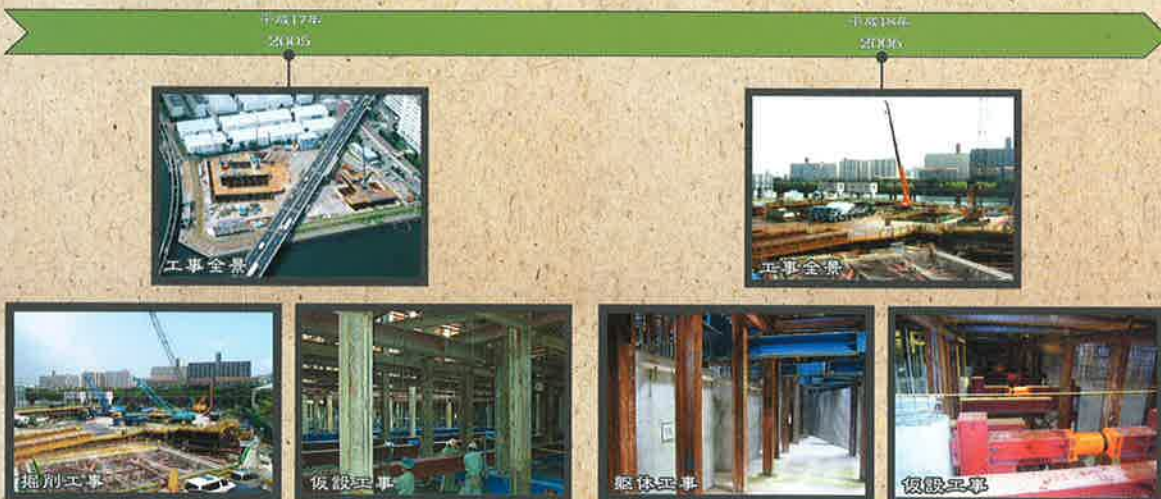


この図はイメージ図です。

これまでの工事



これまでの工事



これまでの工事



むかしの鮫洲浜



鮫洲朝之景

品川歴史館所蔵



浅草海苔製図

品川歴史館所蔵



海苔の採取

●江戸前海苔の海

江戸時代の品川の海は「お茶屋へか浦」といって、將軍家の食事のお茶となる魚や貝を献上していました。主なものとしてタタリガニ、コチ、カレイ、アナゴ、シッコ、アサリなどをはじめ、約300種類もの漁獲があったそうです。そのために、冬の干潟に備えて、海にソダを立て、イケスを作って魚を飼っていました。このソダに海苔がつかまりました。延宝の頃、東海神寺の伊藤僧師が、この海苔の加工方法を教えたことによって海苔の採取が始まったといわれています。

海苔は「ひび立て」から始まり、「海苔の採取」「海苔切り」「海苔すき」「海苔干し」「海苔の取込」「海苔はがし」という工程によってできあがります。

品川浦から大森湾にかけて採れた品川海苔は、遠軍に運ばれ、江戸の名産浅草海苔の名で販売され、全国にその名が知られてゆきました。

江戸前の漁業の中心をなした品川浦・大井郡林浦は、明治から大正への時代の変遷の中でやがて衰退し、海苔養殖業がその存続を続けていました。

昭和に入ると、戦前は軍需産業の拡大とともに東京湾沿岸には海苔産地をはじめとする常産が隆起するようになり、戦後は京浜工業地帯の発展とともに埋め立てが進み、漁民の生活に大きな変化をもたらしました。そして高度成長期には、品川湾頭に続き大井埠頭と大規模な港施設建設に伴って漁場を失い、昭和37年から翌年にかけて4千世帯、約2万人にも及ぶ漁民の漁業権放棄をもって、長い歴史をもった品川の漁業は終焉を迎えることになりました。



南品川鮫洲海岸

品川歴史館所蔵